

佳作

一歩踏み出す勇気と、仲間と出会えた奇跡

福岡県 福岡県立筑紫高等学校一年 一柳 優華

私は高校でラグビー部に入った。けれど、入部を決めたときからずっと不安だった。ラグビーは、男子のスポーツだというイメージが強くて、実際、部員はほとんど男子だった。そんな中に女子の自分が飛び込んで、本当に受け入れてもらえるのかって、ずっと心の中で葛藤していた。「女子なのに」って冷たい目で見られるんじゃないかっていう怖さがあった。

しかも、入部当初、友人関係にも悩んでいた。毎日が不安で、部活どころか学校に行くのも怖くなっていった時期がある。グラウンドに行こうとしても、足がすくんで動けなくなったこともあった。そんなとき、ある男子部員が私に言ってくれた。

「俺がおるときに来たらいい。優華の味方やけん。」

たった一言で、心の中の重たいものが少しだけ軽くなった。今もまだ、怖さは完全に消えていないけど、少しずつまた部活に向かう気持ちがいってきた。

夏の菅平合宿では、顧問の先生から、
「試合に出ないか。」

と声をかけられた。思わず、

「出ます。」

と答えただけで、内心は不安で押しつぶされそうだった。「男子の中に自分が混ざって、本当に戦えるのか。足を引っぱらうだろうか。女子だから無理だと思われるんじゃないか」。試合前からそんな気持ちで胸がいつぱいだった。

試合が始まると、男子との力の差を感じた。ぶつかれば簡単に押し負け、技術の細かさにも圧倒される。自分の動きに一つ一つ悔しさと不安が重なり、涙をこらえながらプレーした。試合が終わり、女子の先輩が、

「頑張ったね。」

と声をかけてくれた。私は思わず、

「全然納得できません。悔しいです。」

と答えた。そんな私に、先輩は、

「試合中ね、男子が『さすが優華やね。男子も負けられない。』って言ってたよ。」

と教えてくれた。その瞬間、胸の奥が熱くなり、こらえていた涙が自然と溢れた。ずっと「女子だから」と見られているんじゃないかと不安だった。でも、仲間は私を女子だからじゃなく、同じ仲間として見てくれていた。言葉だけじゃなく、行動や声のかけ方でそれを教えてくれた。

ラグビーを続けることは簡単ではない。差別への不安や悔しさに押しつぶされそうになることもある。それでも私は、仲間の言葉や応援に支えられ、自分の気持ちと

向き合いながら続けられている。

そして、男子の中で女子にも活躍できる場を与えてもらえることは、決して当たり前のことではない。試合に出してもらえないこと、仲間として認めてもらえないこと、その一つ一つが私にとって大きな励みであり、ありがたさを強く感じる。ラグビーを通して学んだのは、性別よりも「一緒に戦う仲間として認め合えること」が何より大切だということだ。これからも挑戦を続けて、悔しい気持ちも嬉しい思いも仲間と分かち合いながら、自分が誰かの支えになれる存在になりたい。男子も女子も関係なく、互いに認め合えるこのチームを大切にしていきたい。